日本語教育における「形容動詞」の取扱いに関する 一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野呂, 幾久子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008329

日本語教育における 「形容動詞」の取扱いに関する一考察

A Study on Approaches to “Adjectival Verbs” in the Teaching of Japanese as a Second Language

野 呂 幾久子
Ikuko NORO

（平成5年10月12日受理）

I はじめに

外国人への日本語教育における問題の一つに、いわゆる「形容動詞」の取扱いがある。「静かだ」「きれいだ」「有名だ」のように、国文法で「形容動詞」と分類されている語を、いかに教えるかという問題である。日本語学習者にとって「形容動詞」の習得は難しく、「有名の人（有名な）」「大きいだから（大きい）」「きれい部屋（きれいな）」のように、他の品詞と混同した誤用をおこしやすい。しかもそれが、上級になってもなかなか直らないのが現状である。このような誤用を防ぎ、正確かつ効率的に「形容動詞」を習得させるためには、「形容動詞」を日本語教育の中でどのように位置づけたら良いのだろうか。

本稿は、これまでの「形容動詞」論の展開を踏まえて、日本語教育における「形容動詞」の位置づけを探ろうとするものである。

II 「形容動詞」の意味と機能

「形容動詞」は用言の一種であり、形容詞と同様、事物の性質や状態を表す。

また「形容動詞」はそれだけで、

この部屋は静かだ。（終止形）

のように述語になることができ、

静かな場所で話しましょう。（連体形）

のように連体修飾語として使われ、

私たちは静かに本を読んだ。（連用形）

のように連用修飾語としても使われる。また、

この部屋はかなり静かだ。

夜静かな部屋

のように、程度副詞やその他の連用的な成分を受ける。以上のような意味および文構成上の働きから見れば、「形容動詞」は形容詞と差異がない。しかし一方、「形容動詞」の語幹は、

どう、元気？

このお菓子、大好き。

わあ、素敵ね。

のように、それだけ、またはそれに終助詞が加わったものだけでも述語になることが多く、独立性が強い。しかも「形容動詞」の活用は、断定の助動詞「だ」のそれと同型であることから、語幹自体が一つの体言（名詞）であり、それに断定の助動詞「だ」がついたものであるという論につながりやすい。ただし、「形容動詞」の語幹は多くの名詞とは違って、格助詞を伴って主格や対格などに立つことはなく、また、連用的な成分を受ける点で、連体的な成分を受ける名詞（例：高い空。母からの手紙。）とは異なっている。

II 「形容動詞」論の展開

以上のような意味や職能を有する「形容動詞」を、品詞としていかに分類するかをめぐっては、これまで多くの議論が行われてきた。ここではそれらの中から、本稿に関連する現代文法（口語文法）についての部分を中心に、簡単にまとめる。

1 「形容動詞」を一品詞として立てる説

吉澤義則は、「形容動詞」がラ行変格活用とほぼ同じ活用をする点において動詞的性質を持ち、一方で副詞法がある点において形容詞的性質を持つことから、動詞でも形容詞でもない一種の用言として独立させることを説いた。

これを受けて橋本進吉は、吉澤が「形容動詞」とした三種類の活用形のうち、口語では第二種（ダナ活用）のみを「形容動詞」として認め、「だろ（未然形）、だっ・で・に（連用形）、だ（終止形）、な（連体形）、なら（仮定形）」を、その活用語尾とした。この橋本説は、文部省の文法教科書に採用され、その後一般に広まった。

同じ「形容動詞」を一品詞として立てる説でも、寺村秀夫は、「意味の上では形容詞といってよいが、述語として使うときには名詞のように判定詞の助けが要る」¹⁾ことから、形容詞と名詞の中間的性格を持つものとして、これに「名詞的形容詞」という名を与えている。ただし寺村は、文法記述上「名詞的形容詞」を一品詞と認めるが、そもそも日本語の品詞には連続性があり、「名詞的形容詞」も、名詞や形容詞と境を接して隣あっている領域と理解すべきであるとしている。

2 「形容動詞」を一品詞として立てない説

1) 「体言+助動詞」とする説

時枝誠記に代表される説で、我々の常識的な言語意識では「静か」や「丈夫」は一語として感じられること、辞書でもこの形で採録されていることに基づき、「形容動詞」の語幹を独立した体言とみなし、それに指定の助動詞「だ」がついた二語の連続であると説明した。

水谷静夫もまた、「形容動詞」がその性質において用言よりむしろ名詞、副詞に近いことに着目し、これを「無活用の詞+判断辞」と見る立場を取っている。

2) 形容詞の一種と見なす説

鈴木重幸らの説で、「形容動詞」と形容詞は、その語彙的な意味の性質が同じであるだけでなく、品詞を性格づける文論的な働き、形態的なカテゴリーが共通であり、異なるのは主に活用形あることから、本来の形容詞（「い」で終わる形容詞）を「第一形容詞」、「形容動詞」

(「な」で終わる形容詞)を「第二形容詞」と呼び、両者を一つの品詞と見なした。

また佐久間鼎は、口語の「形容動詞」は形容詞だけでは性状表現が十分でないことを補うために発達したものであり、形態よりその意義を重視し、両者を一括して「性状語」と呼んでいる。

以上がこれまでの「形容動詞論」の概要である。このうち吉澤の説は、「形容動詞」の活用がラ行変格活用とほぼ同じであることにより動詞的性質を持つとしているが、これは文語の「カリ活用(例:多かり)」「ナリ活用(例:静かなり)」「タリ活用(例:堂々たり)」についてのものであり、口語の「ダナ活用」にはあてはまらない。また橋本も、「形容動詞」が形容詞と一致して動詞と一致しない点はかなり多いが、動詞と一致して形容詞と一致しない点はほとんど無く、「口語に於いては形容詞と形容動詞とを一類として、動詞に對せしめてもよい」²⁾と述べていることから、「形容動詞」を動詞と形容詞の中間に位置づける説は、考慮の対象から除外できると考える。

すると問題は、「形容動詞」が、

- ① 独立した品詞
- ② 名詞の一種
- ③ 形容詞一種

のいずれかということになる。しかしこれについては後で述べることにし、まず、日本語教育の現状を見てみたい。

Ⅲ 日本語教育における「形容動詞」の現在の位置付け

それでは日本語教育において、「形容動詞」は実際にどのように扱われているのだろうか。またそれによって生じる問題点は何か。初級段階の日本語教育を中心に考える。

1 「形容動詞」の名称

現在日本語の教科書には、「形容動詞」を名詞の一種として扱っているもの

Beginning Japanese : “na-nominal”

Japanese-A Basic course : “qualitative noun”

と、形容詞の一種として扱っているもの

『しんにほんごのきそ』: “な形容詞”

An Introduction to Modern Japanese : “-na adjective”

がある。それぞれの名称は異なっても、前者は上の三つの説のうち②の立場に、後者は③の立場に立って作成されている。つまり、教科書における名称から見れば、「形容動詞」は一つの品詞として認められておらず、名詞または形容詞の下位概念とみなされているのである。

2 初級で学習する「形容動詞」

それでは個々の語はどうだろうか。初級の日本語教育で取り上げられている「形容動詞」を、「日本語教科書語彙リスト」³⁾から抜きだした。「日本語教科書語彙リスト」とは、以下の12種17冊の日本語教科書を調査対象として作成された、初級の日本語教科書に導入されている語彙のデータ・ベースである。

- 1 Young, J. and Nakajima-Okano, K. (1967) Learn Japanese, vol. I, University of Hawaii Press.
- 2 ————— (1967) Learn Japanese, vol. II, University of Hawaii Press.
- 3 ————— (1967) Learn Japanese, vol. III, University of Hawaii Press.
- 4 ————— (1967) Learn Japanese, vol. IV, University of Hawaii Press.
- 5 Mizutani, O. and Mizutani, N. (1977) An Introduction to Modern Japanese, The Japan Times.
- 6 対外日本語教育振興会編 (1971) Intensive Course in Japanese-Elementary-,
ランゲージ・サービス
- 7 Jorden, E. H. (1974) Beginning Japanese, part 1, Tuttle.
- 8 ————— (1974) Beginning Japanese, part 2, Tuttle.
- 9 国際交流基金編 (1987) 『日本語初歩』 凡人社
- 10 早稲田大学語学教育研究所編 (1977) 『外国学生用日本語教科書 初級 (改訂版)』
早稲田大学日本語研究教育センター
- 11 国際学友会日本語学校編 (1986) 『日本語 I』 国際学友会
- 12 海外技術者研修協会編 (1974) 『にほんごのきそ』 スリーエーネットワーク
- 13 Alfonso, A. and Niimi, K. (1981) Japanese-A Basic course-, Sophia University.
- 14 Nissan Motor Co., (1987) Business Japanese I, Gloview.
- 15 文化庁編 (1983) 『中国からの帰国者のための生活日本語 I』 文化庁
- 16 ————— (1985) 『中国からの帰国者のための生活日本語 II』 文化庁
- 17 Jorden, E. H. (1987) Japanese: The Spoken Language-part 1-,
Kodansha International.

リストの中の「形容動詞」を、見出し語、品詞および掲載されている教科書の番号の順に〈表1〉に示す。

〈表1〉初級日本語教科書に導入される「形容動詞」

見出し語	品詞	教科書番号	見出し語	品詞	教科書番号
明か		10	元気	名・形動	1/5/6/7/8/9
安全		5/10/16			/10/11/12/13
嫌		3/5/8/9/10	元気な		14/15/16
		/13/15/17	健康な		15
いろいろ	副・形動	2/5/6/8/9	好適		16
		/10/11/12/13	高等		6
		/14/16	幸福		5
陰気		14	幸い		9

同じ		2/5/7/8/9/10 /11/12/13/15 /17	盛ん		2/5/8/9
		6	さまざま		4
主だ		14	残念		5/6/9/10 /11/14/17
活発		4/8	幸せ		5
可哀相		4/10/13	静か		1/5/6/8/9/10 /11/12/13/14
完全		3/5/6/8/10 /11/12/13/14	静かな		15/16
簡単		15/16	自然	名・形動	4/5/10/13
簡単な		6/11	失礼	名・形動	2/6/7/17
危険		14	地味		8/16
几帳面		6/10	邪魔	名・形動	3/5/6/7/8/9 /11
気の毒		4	自由	名・形動	3/5/8/9/10 /13
急		4	自由に		13
急速		5	十分	副・形動	5/7/8/10/13 /14/16
器用		1/5/6/7/8/9 /10/11/12/13 /14	十分な		8
嫌い		1/5/6/7/8/9 /10/11/12/13 /14/15	正直		1/5/6/7/8/9 /10/11/12/13 /14/17
綺麗		15/16	上手	名・形動	15/16
綺麗な		14	上手な		5/6/8/9/10 /11/13/17
勤勉		6/7/8/9/10 /13	丈夫		16
結構		14/15	丈夫な		14
結構な		3/5/6/9/10 /12/13/15/16	神経質		8
親切		16	ドライ		10
新鮮	名・形動・動	3/5/6/10/11 /12/13/14/15 /16	苦手		1/5/6/9/10 /11/13
心配		8	賑やか		15/16
水平	名・形動	1/5/6/7/8/9 /10/11/12/13 /16	賑やかな		5/6
好き		16	熱心	名・形動	13
		14	馬鹿	名・形動	8/16
素敵		6/10	派手		12
ずばら			ハンサム		13
正確			非常	名・形動	3/5/6/10/13 /14/15
			必要	名・形動	1/5/6/7/8/9
			暇	名・形動	

粗末		16			/10/12/13/14
大嫌い		1/6/10			/16
大事	名・形動	4/6/7/8/9/10	貧乏		4/10
		/11/13	不安	名・形動	16
大丈夫		2/5/6/7/8/10	不安定な		16
		/11/13/15/16	不規則		6
		/17	複雑	名・形動	3/6/8/13
大好き		1/5/6/7/8/9	不景気	名・形動	13
		/10/13/14	不公平	名・形動	5
大切		3/5/6/7/8/9	不自由		5/6/8/10
		/12/13/14/16	不順		6
大変	副・形動	2/5/6/7/8/9	不注意	名・形動	16
		/10/11/12/13	不便	名・形動	3/5/6/8/10
		/14/15/16/17			/11/13/14/17
確か	副・形動	9/10/15/16	不真面目	名・形動	14
だめ		5/6/7/8/10	不用心	名・形動	15
		/13/14/16/17	平気	名・形動	5/8
丁寧		2/6/8/10/13	下手		1/5/7/8/9/10
		/16			/12/13/14/16
適当		2/5/8/10/15			/17
		/16	別	名・形動	8/10/11/15
適当だ		6	変	名・形動	2/6/7/13/17
得	名・形動	6/16	変な		8
得意		2/6	便利	名・形動	3/5/6/8/10
特異		10/14			/11/12/13/14
特別		5/6/7/8/10			/16/17
		/11/13	朗らか		9
真面目	名・形動	9/10/13/14	面倒な		13/16
真面目な		15/16	有望		14
真っ赤		11/13	有名	名・形動	2/5/6/8/9/10
真っ暗		6/13			/11/12/13
真っ黒		6	有名な		15
真っ白		6/11/13	有利		5
真っ直ぐ	名・形動	2/5/7/8/9/10	豊か		2
		/12/14/17	陽気	名・形動	14
まれ		10	楽		3/5/6/9/10
無駄		10			/13/17
無理	名・形動	6/8/9/10/13	楽な		16
		/16	楽に		13
無理な		16	乱暴な		16

迷惑	名・形動	8/15	立派		1/5/7/8
迷惑な		16	立派な		10/15
面倒	名・形動	6/10	わがまま	名・形動	6

* 品詞が「形容動詞」の場合は空欄にした。

** 複数の品詞に分類されている語は、その品詞名を全て示した。

*** 品詞名はスペースの都合上、名詞を「名」、形容詞を「形」、動詞を「動」、副詞を「副」、形容動詞を「形動」と略した。

**** 補助形容動詞「～的だ」を伴う語（例：伝統的だ）は除いた。

〈表1〉によると、初級教科書に出てくる「形容動詞」の見出し語は、17冊の教科書全体で134にのぼる。（ただしこの数字には、一語ではあるが異なる活用形がともに見出し語になっているものも含まれるので、実際の語彙数としては113語である。）その語の表示形式は、語幹（例：明か）が110で最も多く、連体形（例：簡単な）20、終止形（例：主だ）2、連用形（例：自由に）2の順である。しかし学習者の側からみると、この表示形式には、以下の点に問題がある。

第一に、いくつかの教科書では、語彙により表示形式が異なっている。例えば、Intensive Course in Japanese-Elementary- は、「簡単」「危険」をはじめとする45の語が語幹表示だが、「主だ」「適当だ」の2語は終止形表示である。Beginning Japanese は、「変な」のみ連体形表示で、それ以外は全て語幹表示。Business Japanese は、「結構な」「元気な」「十分な」の3語が連体形表示、「綺麗」「下手」などは語幹表示である。また、比較的連体形表示が多い『生活日本語Ⅰ』では、「立派な」「真面目な」など11語が連体形表示で、「親切」「粗末」など12語が語幹表示。同様に『生活日本語Ⅱ』は、16語が連体形表示で、23語が語幹表示である。さらに Japanese-A Basic Course- では、「丈夫」などが語幹、「自由に」「楽に」は連用形、「面倒な」は連体形表示と、3種類の見出し語の形が見られる。これらは等しく形容動詞型活用をする語であり、品詞としては「形容動詞」に分類されている。同じ品詞の語でありながら、なぜ違う形で表示されるのか、そこに何か意味があるのか、学習者に混乱を招くことになる。

第二に、同じ教科書でも、活用形によって異なる品詞に分類されている語がある。これらは全て、語幹は名詞・「形容動詞」に、連用形は副詞に分類されているもので、An Introduction to Modern Japan の「自然」「自然に」、Japanese-A Basic Course の「非常」「非常に」、Beginning Japanese、『日本語Ⅰ』、『生活日本語Ⅱ』の「別」「別に」が見られる。またそれ以外にも、「日本語教科書語彙リスト」全体からみれば、以下の語は活用形により品詞が異なる。

語 彙	表示形	品 詞	語 彙	表示形	品 詞	語 彙	表示形	品 詞
嫌	語幹	形動	健康	語幹	名	乱暴	語幹	形
嫌だ	終止形	形	健康な	連体形	形動	乱暴な	連体形	形動
主に	連用形	副	確か	語幹	副・形	立派	語幹	形動
主だ	終止形	形動	確かに	連用形	副	立派だ	終止形	形
急	語幹	形動	下手	語幹	形動			
急に	連用形	副	下手だ	終止形	形			

学習者は活用型という一つの規則を覚えれば、新しい語彙に出会ったとき、それを型に当てはめて、未然形・連用形・終止形・連用形・假定形・命令形という、別の語彙を産出することができる。もし上のように活用形ごとに品詞が異なれば、学習者はその規則を応用することができず、それぞれの活用形の語彙を一つ一つ覚えなければならない。これは非効率であるばかりか、覚え違いなどによる誤用を生じやすい。またこの表示形式では、同じ「～だ」形なのに、なぜ「同じだ」が「形容動詞」で「嫌だ」は形容詞なのか、なぜ「自由に」は「形容動詞」で「主に」や「自然に」が副詞なのか、という学習者からの疑問に答えることはできない。

第三に、次の語が名詞に分類されている点である。

安心 おしゃべり おしゃれ 大人 勝手 金持ち 逆

楽しみ ハード 反対 不足 ショック 問題 有効 陽気

これらの語は、「が」「を」「に」などの格助詞を伴って主格や対格に立つことができることにより、名詞に分類されたと考えられるが、連体修飾のときには、「～な」形が可能である。(例：おしゃれな人、楽しみな試合) これを名詞のみに分類してしまうと、学習者は名詞修飾のさいに、「おしゃれの人」「楽しみの試合」としてしまう危険性がある。名詞と「形容動詞」の最も大きな違いは連体形であり、「～の」の形で名詞を修飾するか、「～な」の形で修飾するかは、学習者にとって大きな問題である。その語がどちらの形をとるのかを明確に示せない表示形式は、学習者の誤用を招くことになる。

以上のように、現在の日本語教育における「形容動詞」の扱いは、活用によって、そして語彙によって異なり、統一性に欠けると言わざるをえない。そしてその不統一性が、学習者に混乱を与え、「形容動詞」の学習をより難しくしていると考えられる。誤用を防ぎ、正確かつ効果的に「形容動詞」を習得させるために、明確で一貫性を持った新たな位置づけが必要である。

IV 日本語教育において「形容動詞」をいかに扱うか

それでは、「形容動詞」のどのような位置づけが適当なのだろうか。この問題について、村崎(1977)は次のような提案をしている。

- 1 形容詞、名詞、動詞などとは別の品詞を立てる。
- 2 これを「名詞形容詞」と呼ぶ。
- 3 名詞形容詞の基本形は「～な」の形とする。
- 4 辞書にはこの基本形を掲げる。
- 5 述語形「～だ」は、基本形「～な」+指定詞「だ」と解釈する。基本形に名詞以外の形

式が接続する時は、「な」が取れるという規則を設ける。

- 6 副詞形「～に」は、基本形「～な」+副詞句形成助詞「に」と解釈し、5の規則を適用する。

筆者はこのうち、1～4の点について賛成するものである。

まず1についてだが、IIの①～③の説のうち、②の説では、よく挙げられる例だが、

彼は非常に健康だ。

大切なのは健康だ。

の二つの「健康だ」の違いを説明できない。時枝説では両者はともに、「健康」という詞に「だ」という辞がついたものと理解されるが、我々の言語意識において、この二つを全く同じ表現とすることは不可能である。すなわち、前者の「健康」は性質や状態を形容的に表しているのに対し、後者のそれは「健康」というものの実体を表している。そしてこの違いは単に意味の問題に留まらず、例えば「主語に立てない」、あるいは「格助詞が後に続いて位置し得ない」など、その語の機能上の違いとして現象面に現れてくるのである。

反対に③の説は、意味的には確かに「形容動詞」は形容詞と非常に近い特徴を持つが、その活用形および接続のしかたなどの形態的特徴は大きく異なり、名詞に近い。ゆえに、両者を意味の見地だけに基づいて同一の品詞として分類することには無理がある。以上が国文法上の理由であるが、日本語教育においても、学習者にとって「主語に立てるか否か」と「活用形の異同」は重要な問題である。その二点が異なる以上、「形容動詞」は名詞でも形容詞でない一つの独立した品詞として扱うのが妥当であると考ええる。

2の名称については、現在の「形容動詞」では、形容詞と動詞の中間的性質を持つ品詞という印象を与えるので、変更が必要であると考ええる。そのさい、寺村の「名詞的形容詞」では「形容詞の一種」とみなされる恐れがあるので、村崎の「名詞形容詞」が適切かと思われる。

3の基本の形には、「形容動詞」の最も特徴的な形を採用するべきである。その意味で、名詞や形容詞と区別する最も明確な特徴である、連体形の「～な」を基本形とすることに賛成である。なお、筆者が3人の成人外国人学習者を対象に、8回にわたって収集した発話を分析した結果でも⁴⁾、「形容動詞」に関する誤用のうち、ほとんどが連体形であった。その誤りのパターンは、

- 1) 活用語尾「な」の省略による誤り

親切先生です。(親切な)

簡単英語解ります。(簡単な)

きれい花貼ってあります。(きれいな)

- 2) 活用語尾の選択の誤り(「な」→「の」)

ちょっと簡単の言葉(簡単な)

貧乏の子どもたち(貧乏な)

静かの熊ですね。(静かな)

の二種類に大別されるが、これを品詞的に見ると、1)は形容詞型連体修飾(形容詞+名詞例：大きい本)、2)は名詞型連体修飾(名詞+の+名詞 例：日本語の本)になっている。もち

ろん、この誤用の背景には、母語の干渉、過剰般化など様々な要因が考えられるが、「形容動詞」型連体修飾（「形容動詞」語幹+な+名詞 例：有名な本）を強調するために、「～な」形を「形容動詞」の基本形とする事は意味がある。

そして何より重要なのは、基本形を定めたら、一冊の教科書の中はもちろん、異なる教科書、辞書においても、一貫してそれをを用いることである。不統一な扱いは、学習者の混乱を招くだけである。

なお、複数の品詞に分類される語彙、例えば先に問題にした「健康」などは、

健康（名詞）	good health
健康な（名詞形容詞）	healthy

のようにそれぞれの品詞を掲載し、特に辞書には、できるだけその用例をつけることが望ましい。

ただし5、6の点に関しては賛成できない。村崎は、終止形の「～だ」は、名詞の述語形と形ばかりでなく意味的にも全く同じであることから、連体形の活用語尾「な」は名詞形容詞（「形容動詞」）に付属している語尾とし、「だ」は名詞の述語形の指定詞と同じものであると認定している。しかしこれでは、「単独で述語になれる」という「名詞形容詞」の機能的特徴に反することになり、また前に述べたように、学習の効率の面からも、一つの語彙は活用形の違いによらず、同一の品詞に分類する方が望ましい。さらに、もし終止形、連用形にこの規則を設けるのであれば、未然形、仮定形にも規則は必要である。よって、終止形、連用形に関しては、形容詞と同様、名詞形容詞の活用の一つと考えても良い。

V まとめ

以上、日本語教育における「形容動詞」の位置づけについて考察してきた。母語話者にとっての文法、あるいは品詞分類とは、すでに身につけた言語、日常生活で話し、聞き、読み、書いている言語の構造を整理しなおし、体系づけるためのものである。しかし外国語として学習する人にとって、話は逆である。まず規則を覚え、その規則を使って新たな文を作る。例えば「静か」という語が「形容動詞」であると覚えた学習者は、その活用の規則に基づき、「この部屋は静かだ」や「静かな部屋」という文を作るのである。ゆえに、語学教育における文法あるいは品詞は、規則の応用、そして新たな文の産出を、正確かつ効率良く行うことを可能にするものでなくてはならない。その結果として、文法や品詞のあり方が、本来の国文法との姿とは異なることも有り得るかと思う。本稿の「名詞形容詞」も、日本語を母語とする人にとっての「形容動詞」とは、名称、基本形の点では異なっている。しかし、日本語教育においては、意味・形態・機能という基準に加えて、学習者の側の視点も取り入れた位置づけが必要かと思われる。

注

- 1) 寺村秀夫(1986)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版、p. 53
- 2) 橋本進吉(1935)「國語の形容動詞について」『藤岡博士功績記念論文集』岩波書店、p. 387
- 3) 「日本語教育語彙リスト」は、文部省科学研究費補助金試験研究(1)として、1987年から3年間にわたって行われた、「パソコンによる外国人のための日本語教育支援システムの開発」のための基礎資料として作成された。
- 4) 日本語学習者が「形容動詞」の学習にあたって、実際にどのような誤りをおかすのか調べる目的で、学習者の日本語発話を収集し、分析を行った。方法は、2～3週間に1回(約30分)、個人面談の形である。期間は1993年2月から同年7月までの計8回。対象とした学習者は、静岡大学第12期教員研修留学生の3名である。面談開始の時点で、3名とも来日5カ月目であり、静岡大学日本語コースの初級を学習中であった。

参考文献

- 国立国語研究所 (1972)『国立国語研究所報告44 形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- (1990)「日本語教科書語彙リスト」文部省科学研究費補助金試験研究(1)
62890010『パソコンによる外国人のための日本語教育支援システムの
開発』日本語教育支援システム研究会、pp. 148-325
- 佐久間鼎 (1966)『現代日本語の表現と語法』恒星社厚生閣
- 鈴木重幸 (1988)『教育文庫3 日本語文法・形態論』むぎ書房
- 寺村秀夫 (1986)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 時枝誠記 (1992)「いはゆる形容動詞の取扱ひ方」『日本文法 口語篇』岩波全書
- 橋本進吉 (1935)「國語の形容動詞について」『藤岡博士功績記念論文集』岩波書店、
pp. 389-421
- 水谷静夫 (1951)「形容動詞辨」『日本の言語学 第四卷 文法 II』大修館書店、pp. 395-413
- 村崎恭子 (1977)「『名詞形容詞』について—いわゆる形容動詞の扱い方—」『日本語学校論集
4号』東京外国語大学外国語学部附属日本語学校、pp. 96-103
- 森岡健二 (1974)『シンポジウム日本語 第2巻 日本語の文法』学生社
- 吉澤義則 (1932)「所謂形容動詞に就いて」京都大学文学部国語学国文学研究室『國語・國文
第二卷第一號』中央図書出版、pp. 1-37